

高速インターネット基盤未整備地域住民の生活環境 と意識（１）：東海地域を事例に

著者	米田 公則
雑誌名	椋山女学園大学 文化情報学部紀要
巻	8
ページ	19-26
発行年	2009
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00001945/

高速インターネット基盤未整備地域住民の 生活環境と意識(1)

——東海地域を事例に——

米 田 公 則

1. はじめに

21 世紀に入り、我が国のブロードバンド環境は、e-Japan 政策など、政府の積極的な情報化政策の推進に後押しをされて、急速に整備されつつある。東海地域においても、ブロードバンド環境の整備が進み、平成 20 年で、DSL、FTTH、CATV サービスをすべて合わせたブロードバンドサービス世帯普及率は 60% に達し、都市部では、FTTH などの高速ブロードバンドのサービスエリアも順調に整備されつつある。

ブロードバンド環境は全体的に見ると順調に整備されつつあるということができよう。しかし、詳細に見ていくと、情報基盤が整備された地域の中でも距離的な問題から高速インターネットが使えない地域や、未だ高速および超高速インターネットが未整備な自治体も存在している。

山間地域など人口が密集していない地域では、デジタル・ディバイドの問題、2011 年の地上波デジタル放送への完全移行をなど様々な課題を抱えている地域も依然存在する。これらの地域では、地域情報化に関する課題も多様かつ複雑で、優先されるべき課題も地域によって大きく異なっている。

本研究は、東海地域を事例に、ブロードバンド環境が整備されていない地域住民が、ブロードバ

ンドに対し、どのような意識や期待感を持っているのかを地域の現状の調査をふまえながら研究したものである。

調査は、東海地域で現在ブロードバンド環境が未整備な愛知県設楽町、一色町佐久島を対象に行った。

2. 住民調査の概要

住民に対する調査は、住民に対するアンケート調査ならびに、地区住民の代表者に対するヒヤリング調査の二つを行った。

地区住民に対するアンケート調査は、住民がインターネットをいかに利用しているのか、あるいはブロードバンドに対してどのような意識や要望をもっているのかを調査するために、ブロードバンド環境が整備されていない設楽町・神田地区と一色町・佐久島、さらに両者との比較のために、ブロードバンド環境は整備されている設楽町・田口地区を対象に、アンケート調査を実施した。

(1) ヒヤリング調査の概要

ヒヤリング調査は、設楽町神田地区については、平成 20 年 5 月 29 日に、区長他 4 名に対して、ヒヤリング調査を行った。一色町佐久島については、平成 20 年 6 月 5 日に、東区長、西区長に加え、東地区から 3 名、西地区から 4 名の代表に対して、

対象地域	配布対象世帯	回答数	世帯数当たりの回答率
設楽町・田口地区	122世帯	67	55%
設楽町・神田地区	77世帯	47	61%
一色町・佐久島	139世帯	89	64%

ヒヤリング調査を行った。

(2) アンケート調査の概要

——配布世帯数および回収数、回収率

アンケート調査の対象地区の世帯数および、回答数は以下のとおりである。今回のアンケート調査は、対象世帯に複数のアンケート調査を配布し、18歳以上の住民全員を対象にした。

アンケート方式（紙媒体配布、無記名による設問回答方式）

三地区の各区長の協力を得て配布、郵送にて返送回収

設楽町・田口地区・神田地区 平成20年5月10日から平成20年5月30日まで

一色町・佐久島 平成20年5月20日から平成20年6月10日まで

3. 調査対象地域の概況

(1) 愛知県北設楽郡設楽町

設楽町は、愛知県の北東部に広がる三河山間地域の中央に位置し、名古屋市中心部から約90km、豊橋市、豊田市の中心部から約55～60kmの距離にあり、総面積273.96km²で、総面積の9割が、山林を占め、1000メートル級の山々が連なり、豊川、矢作川、天竜川の水源地ともなっている。

東は東栄町、豊根村、西は豊田市足助・下山、南は新城市、北は豊田市稲武、さらに長野県根羽村に隣接している。いわゆる「平成の大合併」で周辺町村の多くが豊田市や新城市と合併したのに対し、設楽町は津具村と合併をしたが、町名その

ものの変化もなく大きな変化もなかったといえよう。

平成19年の人口は6480人、世帯数2471世帯となっている。昭和35年の総人口14975人、昭和50年の人口9963人と比較すると、それぞれ人口減少率は、56.7%、34.9%と昭和から平成にかけ、一貫して人口が減少している。

65歳以上の高齢人口比率（平成17年国勢調査）を見ると38.8%と県全体の高齢人口比率17.3%の倍以上の比率である。

産業別就業人口を見ると、第三次産業従事者が徐々に増加し、昭和50年33.3%、60年38.8%、平成7年45.7%、平成17年53.2%となっている。しかしこれは第三次産業が大きく発展したというより、第一次、第二次産業従事者が減少し、相対的に比率が高くなったものである。昭和50年から平成17年までの就業者数を見ると1816人（昭和50年）、1925人（昭和60年）、1935人（平成7年）、1697人（平成17年）となっている。設楽町は、山間部に位置し、林業の長い歴史と伝統がある。しかし、戦後日本の林業が外材に押され、衰退してきたのと同様、設楽町も同じ歩みをたどってきた。林業従事者は昭和45年の349人をピークに、減少を続け、平成17年ではわずか21人となっている。

(2) 愛知県一色町佐久島

佐久島は、三河湾の湾口部よりに位置し、本土からの距離は約4.7km、面積約1.8km²で、三河湾に浮かぶ3つの島の中では最も広い面積を有している。地形は比較的起伏に富んだ丘陵地となっており、海岸線は浸食により海食崖が発達し、風

光明な三河湾の島嶼景観の中心として昭和33年には三河湾国定公園に指定され、平成3年には三河湾地域リゾート整備構想の重点整備地区にも指定されている。

島の土地は、平成17年時点で森林31%、原野3.3%、宅地7.7%、その他が57.6%を占めている。三島で見ると農用地が昭和55年時点で23ヘクタール、総面積の7.1%であったのに対し、平成18年時点で1ヘクタール、0.2%まで減少しているが、その理由は、最大の農用地を有していた佐久島で人口の減少、高齢化などにより、耕作放棄地が増加していることによるものである。

平成17年の国勢調査によると島の人口は、315人、世帯数139世帯となっている。平成12年国勢調査と比較をすると、人口減少率は、8.4%で、人口が最も多かった昭和22年の1634人に比べると、5分の1以下に減少している。平成7年からの10年間で見ると、人口減少は19.6%で、この10年間も大きく人口が減少していることが分かる。

65歳以上の高齢人口比率（平成17年国勢調査）を見ると、48.3%に上り、県全体の17.3%、日間賀島、篠島が26%前後であることと比較しても、高齢化がいかに進行しているかが分かる。

1世帯あたりの人口も2.3人で、県平均の2.6人に比べ少なく、世帯数そのものも大きく減少している。日間賀島、篠島の1世帯あたりの人数が県平均を超え、3人前後であることと比較しても、高齢化と同時に、高齢者の単独世帯が増加していることが推測される。

本土との交通は、一色漁港より一色町営渡船が一日6便程度運航されており、片道約20分程度である。他の二島は、師崎港などから定期航路が開設されているが、これらの島と佐久島との航路は開設されていない。これら二島の航路は、師崎港から高速船が一日20便以上、それ以外にフェリーがあり、河和港からも高速船が運航されていることを考えると、最も交通の便の悪い状況にお

かれている。

佐久島の産業を見ると、主要産業は水産業であるが、漁獲量では258トン、漁獲高1億6900万円で、三島の内最も経営規模が小さく日間賀島の20分の一程度となっている。専業漁家は70戸程度で、他の二島に比べ専業の比率が高いことが特色である。

産業分類別就業者数で見ると、第一産業就業者と第三次産業就業者はほぼ同程度で、それぞれ71人46.9%と66人44.6%を占めている。

4. 対象地区の現状と課題

——ヒヤリング調査より

ここでは、設楽町神田地区および一色町佐久島地区の住民に対するヒヤリングをもとに、これらの地区がどのような現状にあり、どのような課題を持ち、また地区住民がどのような意識を持っているのかを明らかにする。

以下の文章で括弧に入れてあるのはすべて地区住民の発言であり、それを筆者が再構成したものである。

(1) 設楽町神田地区

1. 神田地区の現状についての認識

まずヒヤリングした地区の現状について発言を求めた。そこで最初に出されたのは「高齢化率が53%で、限界集落の域に達して」おり、「65歳以下の若い世代が少ない」ということであった。この地区は現在「73戸、人口が約170人、空屋家屋も毎年増えている」のが現状である。

このような状況になったのは、山林経営の低迷が主要な原因と考えている。「昭和30年くらいに、外材が入ってきて山林経営が低迷し、仕事が減り家族で集落を出ていく人が増え、現在は、仕事の都合や格差のあるところでは子どものためにならないと考える人が出て行っている。」

「空家屋の周辺の田畑が荒れ放題になってい

る。」

人工の急激な減少・転出は単にそれだけの問題ではなく、その後の地域にとっても多くの問題を残す。空き家となった家屋並びにその周辺の田畑の荒廃は、周辺の田畑へも影響を及ぼす。荒れ放題とはいえその田畑・家屋は、個人の所有地であるために、この問題を解決することは容易ではない。

2. 勤務先と買い物について

「町内の仕事は、農協が役場くらいなので、今いる人口で、仕事がまかなわれており若い人たちの仕事ない。あまり遠くにはいけないので、通勤するとすれば新城くらい。」

「町内の買い物は役場の前のスーパーか移動販売。新城へ行く人も多い。」

町内には、中心部にスーパーがある。しかし、中心部の人通りは少ない。これは、高齢化に伴い移動が困難であることも影響しているものと考えられる。

3. 交通、車の必要性

「今は車がないと生活は難しい。」

「何年か前までは東栄町までバスがあったが、今の町営バスは日曜日に動いてくれない。また、病院に行って帰ってくると2時くらいになってしまう。」

「町にお年寄りのためにも交通機関が必要だと言ったが、国の補助金をもらう関係で、町はスクールバスとして運行している。」

山間部においては、車は必需品である。車の利用できないものはバスを利用することになるが、近隣の東栄町まであったバスは廃止となり、現在町営バス4路線で運行されている。路線の本数は、1日4本から6本程度で、住民の最低限の移動手段を保障するという程度のものであり、朝家を出ても、帰りが午後になるという状況である。また、補助金の関係もあり、日曜日には運行されておらず、日常的な交通手段としては十分な役割を果たすという状況ではないことが分かる。

4. 医療

「田口（役場の近く）か新城へ行っている。」

「新城市民病院は受け入れできなくなっている。」

「今は東栄病院の若い先生達が熱心に来てくれる。」

設楽町は医療体制において様々な問題を抱えている。設楽町は町営の病院がなく、旧津具村との合併により、つぐ診療所が設楽町内の診療所となったが、高度医療の機関としては不十分である。

旧来は多くの町民が新城市の新城市市民病院に医療依存をしていたが、新城市の財政問題から、市民病院の受け入れ体制も変化し、広域の医療機関としての機能を低下させている。現在設楽町民は、東栄町の東栄病院か、豊田市足助町が近い地区ではそちらに依存しているものもいる。

しかし、いずれにしても、身近に医療機関がなく、緊急の医療、高度な医療から排除されているという状況に変わりはない。

5. 地域の安心・安全の課題

「高齢者への悪質な訪問販売があるようだが目が届かない。」

「緊急性があるときにドクターヘリがくるが、ヘリポートが整備されていない。」

「地震があれば、すべて道がふさがってしまうので、ドクターヘリが来ることになるが、現在、着陸地として使っている学校は、非常時の避難場所となっており、テントが立ったらおりられない。」

地区住民へのヒヤリングで出る課題は、やはり緊急の事態に対する対応策、体制が不十分だという認識である。現在は住民それぞれが日々の生活をしている。しかし、いったん地震など災害が起こったときには、それに対応する人的体制もできておらず、施設面でも問題を抱えているという認識を持っている。

これらの課題は、すでに地区住民のレベルで解決できる水準を超えていると言わなければならない

い。地区住民自らの「限界集落」と自虐的に言っているが、これはすでに問題がより広域的、上位の体制において検討される時期になっていることを意味していると言わなければならない。

6. 町へ要望等

「ヘリポートの整備。」

「国道473号の整備、トンネルのバイパス。」

「林道を作ったが整備されていない。」

これらの意見・要望は、設備に関するものである。

ヘリポートの整備の要望は、先の安全安心に関わるものであり、ドクターヘリなど、緊急時の対応としてヘリポートの要望が出ている。また、国道473号線の整備については、周辺市の中で最も発展を遂げている豊田市へのアクセス道路としては、その整備状況が不十分で、日常的に活用する道路として不十分であるという認識だということである。

道路状況は、市町村合併の状況にも影響していると見ることができる。設楽町より北部にある稲武町は豊田市と合併を行っている。これは、豊田市から飯田市へつながる幹線道路が整備され、三河地域と南信州を結ぶ地域の主要な道路となっており、その途中に稲武町があるという関係から、稲武町と豊田市との交通アクセスは良好だということが一つの理由と考えられる。

7. パソコン・携帯電話などの情報機器利用

「パソコンを持っている人は半分ちかくが年賀状作成だけの人もいる。」

「先日（ブロードバンドに関する）アンケートの回収率がどれくらいかわからないが、近くの80歳くらいのお年寄りからさっぱりわからないと言われた。」

「今インターネット関係でパソコンに拒否反応を起こしてしまう人がいる。」

「デジタルテレビにインターネットにつながる機能があるが知らない人が多い。」

「高齢の人は、今の生活で十分問題はなく、地上

波デジタルのテレビを買ってもその使い方がわからない人も多い。」

このように、やはり高齢者にとって近年の情報機器の発達は、急速すぎ対応できないという認識がある。

「新しいものに取り組んでいかないといけないという思いもあるが、今の生活で不自由もない。情報も新聞、ラジオ、雑誌や町の広報である程度のことはわかる。それ以上の情報はパソコンの領域内となるが、そのような情報はいるのか。」

このように、現在のテレビ、新聞を中心とする情報で事足りるという意見も多い。しかし他方で、「通信にしろ、いろんな事がどんどん進んでいき、いずれはそういうものに切り替わっていき、生活できなくなるのではと危機感を持っている人が少なくない。」という意見もある。情報機器への対応に関しても、かなり個人差が大きく、「ブログ仲間では大正生まれの人もいて、デジカメも使いこなしている。」「やる人は興味のある人、そういう人でないとできない。」

また、「インターネット、携帯電話の料金は年金生活には苦しい」というように、過疎、高齢化の問題が根底にあることが分かる。

「こうした集落で情報化が可能なのか、効果はあるのかわからない。」「やらなければ取り残されるという考え方の人もいるが、現状と地域性を考えると、必ずやらなければならないというものではない。いいことばかりではなく、悪いこともある。」

「情報過疎だということもわからないほどの過疎ということ」という発言に見られるように、全体的に見ると情報過疎の現状について、その状況に甘んじるという意識が強いことが伺える。

(2) 一色町佐久島

1. 一色町佐久島の現状についての認識

「いわゆる限界集落。ここ5～6年で島民は100名くらい減少している。30年前に700人くら

いいと思うが、今では320人くらいに減少してしまった。」「この先、島がどうなるかが心配。島の活性化のためにいろいろ努力している。I、Uターンで定住した者もいるが、人口増には至っていない。」

「島には、若い人が働くような仕事が無い。」

「島には、若手が少なく、将来が心許ない。50歳を越えても若手と呼ばれる。」

「若者(20～30代)が集まって話をしているとところを見ることはあるが、何をやっているかまでは解らない。40代～50代の人数が少ない。」

2. 勤務先と買い物

「島から本土に通勤する人は、今はいない。帰りの船は17時50分が最終のため、仕事が終わってから船に乗れない。本土から島に働きに来ている人はいる。」

「野菜は自給自足。肉は、本土で一週間分まとめ買いをして、冷蔵庫で保管が多いと思う。」

佐久島の金融機関、学校関係者は本土から船を利用して、毎日島に渡ってきている。

買い物などは、島内に店はあるが、多くの人はまとめ買いをしている。

3. 交通

「高校は、本土の一色高校であれば島から通うことが出来るが、部活は最後まで出来ない(渡船の時間の関係)。昭和30年代から本土の高校に通うことができるようになった。昔は吉良高校にも通えたが(佐久島～吉良町の渡船があった時代)、今は下宿しないと無理。就職は、どうしても本土になる。」

「娘が渡船で高校に通っており、日が高いうちに帰ってくるので、安心できる。そういう意味では、渡船の最終便が17時台でもかまわない。佐久島は今のままでも十分魅力がある。」

佐久島からの船は、通常ダイヤで朝7時40分発。次は9時30分で、第一便を利用しないと本土に通うことは困難である。それに対し、佐久島への船は、7時台と8時台にそれぞれ1台ずつあ

る。最終の船は、いずれも5時台であり、一般勤務の者が佐久島から通勤することは困難である。

4. 医療

「西地区には一人暮らしの人が多く、平均年齢も70歳くらいになる。島にも診療所を作ってもらっているが、週に3日は医者がいらない。診療科目も、眼科、歯科はなく、診療所で対応出来ない病気の場合は本土の医者に通うことになり、通院も大変。インターネットで遠隔医療が実現出来れば、高齢者には大変助かる。」

「診療所で見る事が出来るのは、内科と外科。その他は本土の医者にかかる必要がある。医者に通うのも、医療費よりも交通費の方が高いことがあるくらい大変。渡船の料金は、70歳以上の場合2割程度の補助があるのでまだ良いが、渡船で渡った後の移動にタクシーを使ったりするとかなりの額がかかる。眼科は巡回バスがあるので良いが、歯科はバスもないので特に大変。(日間加島には歯科がある)」

佐久島には、診療所があるが、常時勤務医が滞在しているわけではない。本土での診療にも金銭面、時間の面など多くの負担があることが分かる。このような状況で地域の住民は、遠隔医療に大きな期待を寄せている。

5. 地域の安心・安全の課題

「医療、防災対策。島の消防団で40人の人数を確保しようとする、年齢を65歳までにしないといけない。本土の一色町消防団は団員を3年やれば次の人にかわることができるが、佐久島では30年消防団員をやっている者もいる。消防団員の40名のうち、実際に島にいるのは半分くらい。医療関係では、ドクターヘリを呼ぶためには、診療所の医師又は消防団員が必要となる。」

医療について、地域住民が関心を持っているのが、防災である。消防団は高齢化し、体制としても不十分な状況である。

6. 将来への期待

「学校はなんとか維持をしてもらっているが、

若い人が働きたいと思うような仕事が無い。島の活性化プロジェクトで、定住を促進している。」

「アートによる島おこしは、メディアが取り上げてくれた関係で、観光客の増加という点ではプラスの効果が出ているが、経済効果が有るかといわれるとよく分からない。」

「観光客が来てくれるだけで、渡船は料金が上がらないとか、本数が減らないという効果がある。定住促進のための活動も大事。」

「メディアの影響で、最近は佐久島の知名度もだいぶん上がってきた。今年のゴールデンウィークは、1日1,000人、観光客が来た日もある。メディアを上手く利用することも必要。」最近の観光客は、日帰りで、コンビニの弁当を本土で買って帰りにゴミだけ捨てていく。その上マナーも悪い人が多くなってきた。個人の釣り船も減り、観光客が増えてもそれほど金が落ちなくなった。」

「観光客は増加傾向にある。町が行う行事やイベントの効果も観光客の増加に効果があると思う。渡船の便数は多くないが、増便すれば観光客が増えるとも限らないが、どうすれば良いかわからない。」

近年佐久島は、アートによる島おこしなど、地域情報の発信に積極的である。旧来このような取り組みは、日間賀島、篠島に比べると後れをとってきたと言わざるを得ない。これにはいくつかの要因が考えられるが、一つには日間賀島、篠島は名鉄が交通機関（船）として入り、両島を知多半島全体の観光拠点の一つとして位置づけ、積極的に宣伝、観光客誘致を進めてきたことによる。それに対して、佐久島は、この両島と定期船の運航がなく、行政的にも知多半島ではなく、幡豆郡一色町と合併したという経緯がある。そのために観光開発への取り組みが後れをとってきたのである。

近年ようやくこの状況に対する改善の試みが進められつつある。先のアートによる島おこしはその一例であり、地域の情報発信が重要であること

が島民にも徐々に浸透してきている。観光客の増加が、地元に金を落とすという効果と結びつくということを疑問視する声もあるが、渡船の利用者増には確実につながるものであり、この点を評価する声もあった。

7. 高速インターネットサービス (BB) への期待

「都会ではインターネットによる在宅勤務が出来るようになってきているので、島に高速インターネットを使えるようにし、定住を促進し、過疎対策にしたい。そのためにも、BBは必要。」

「神奈川県 34歳の男性から、島で住みたいという相談がある。機械設計の仕事をしているので、BBがあれば島でも仕事出来る。島の中でもインターネットをやっている者がいるので、インターネットをやっている人のためにも、過疎対策としてもBBは有効だと思う。」

「BBは必要との声はあるが、多数意見かどうかはわからない。島の中でインターネットをやっている家は、20軒くらいあると思う。私は趣味で（楽天）オークションを携帯電話でやっているが、やりにくい。役場のPCでやるわけにはいかない。BBではないので、映像も出るのが遅いし、宅配料金も高いので、あまりメリットは無い。離島は宅配業者が来ないので、代引きが使えず、高い料金の物を買うのも不安がある。島民の中には、旅行の申し込みをネットでやっている者もいる。最近は、役場の日報もネットで送っている。以前、ウィルス対策のソフトのバージョンアップをやったら、ものすごく時間がかかった。」

「アサリをネットで売りだしている者もいるが、島のアサリがまだ小さい時から売られていたりして、怪しい商売もある。BBを使えば民宿の宣伝もでき、いろいろ出来ることはある。」

「ブロードバンドは若い人を取り込むために必要。ブロードバンドが出来るようになれば、ネット取引、オークションも出来るようになる。」

「島では、ネットが遅いことが問題。時間がかかると見たくなる。ネットが遅いということ

は、島のみんなの感想。」

以上は、ブロードバンドへの期待の声である。島民の多くは、ブロードバンドが整備されることにより、在宅勤務や観光・地域情報の発信などの手段として大きな期待を持っていることが伺える。

8. 島の生活に対する意識

「佐久島では、行事の参加、ボランティアへの参加もしやすい。都会から来た者としては、新鮮に感じる。ただ、島に移り住んでも島の生活に合わず、残る人がいれば、出て行く人もいると思う。若い観光客が島に来て、ここに住みたいと思う人がいても全然不思議ではない。」

「移住者としては、この島に来て金儲けをしようと思っていない。今までの生活で無いものを求めて来ており、都会よりも心が豊かな生活をしていると思う。そういう生活を求めて移住してきた。そういう人がまだまだいると思うので、まだまだこの島も期待がもてる。」

「若い人の中にも、日本はもう成長できないということを悟っている人もいるので、高齢者だけで無く、農業をしに島に来たいという人はいると思う。」

「人数は少ないが、そういう考え方の人もいると思う。女性がついて来てくれるかどうかはわからないが。」

「島では、飲み水さえなんとかなれば、生活はできる。そのためにも、島や島の農地を荒らさないようにしなくてはいけない。」

「空き屋の軒数は、55軒くらいあるが、年に二、三日くらいは、盆・正月に帰ってくる。本当に帰ってこないのは10軒くらい。」

「全くの空き屋となると、古くなって人に提供出来なくなってしまう。」

「島の人が見ると使い物にならないとおもうような家でも、島外の人が見ると古民家としての価値があると思う人もいる。」

佐久島の人々の中には、自分たちの住んでいる

島が魅力あるものだという事を認識している人も少なくない。今回の調査においても、積極的に地域活性化のボランティアに取り組んでいる人やブロードバンドへ多くの期待をしている人の意見を聞くことができた。

(3) 両地区の比較

設楽町神田地区、一色町佐久島地区、両地区のヒヤリングを行い、両者が共通に多くの問題を抱えていることが分かった。両者に共通の関心事は、医療、安全、安心に関わる問題であり、特に近年の医療環境の悪化は、高齢化がすすむ両地区にとっては大きな負担となっている。海が荒れれば、孤島になる佐久島、地震などで道路が遮断されれば、同様に陸の孤島となる設楽町では、緊急時、非常時への不安が大きい。

しかしながら、ヒヤリング調査においては、両者に差があることも鮮明になった。特にブロードバンドへの期待という点では、大きな期待の差がある印象を受けた。設楽町に比べ佐久島の方が大きな期待を持っている。この要因について、アンケート調査の分析を含め次回以降解明する課題であるが、一つの背景として佐久島が「アートの島佐久島」の取組みや観光資源を活用した、いわば「まちおこし」的活動を積極的に展開していることが影響していると考えられる。

(続く)

こめだ・きみのり / 文化情報学部教授
E-mail:kameda@sugiyama-u.ac.jp